鶴見半島及び大島地域の自然景観

海食地形が特徴的な地形景観

鶴見半島及び大島地域は、典型的な沈水海岸で、特に鶴見半島の東岸と大島の東岸は明瞭です。太平洋からの風波による直接の海食作用のため、堅い露岩も容赦なく削られた海食崖が切り立ち連なっている情景をはじめ、離れ岩、スタック、海食洞、海食洞門など海食のすべての現象が見られる典型的な地形景観の地域です。地質は、西南日本の重要な地質構造の四万十帯に属し、チャートや枕状溶岩などの分布や大規模な褶曲（しゅうきょく）構造など、太平洋プレートの大規模な移動の跡を伺うことができます。

典型的な海食洞門、壇の窓（大島）

断崖に打ち寄せる黒潮（鶴御崎）

細長い半島の北と南で異なる海塩の影響

鶴見半島と大島は、海の中に細長く突き出た半島と離島で、流水や井戸水の水質は、吹き付ける海塩の影響をうけているが、その量は季節によって北斜面と南斜面とでは差が見られます。流水中の塩分量の場合、北斜面では30ミリグラム、南斜面では40ミリグラムでした。それでも大分県南端の離島深島の160ミリグラムや豊後水道北端の高島の120ミリグラムに比べるとはるかに小さいのです。これは水道の真ん中に浮かぶ島と細長く突き出た半島では地形や位置の上から、北上する黒潮の影響の違いの大きさを表しています。

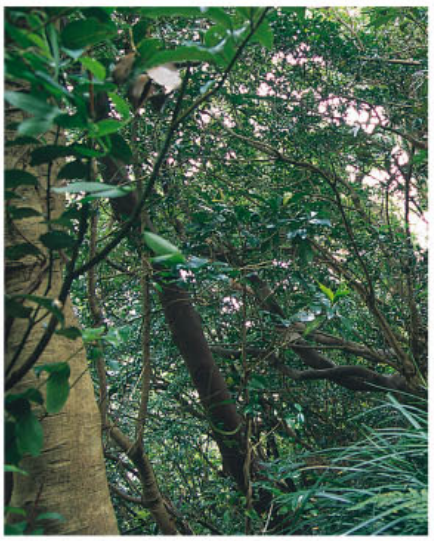
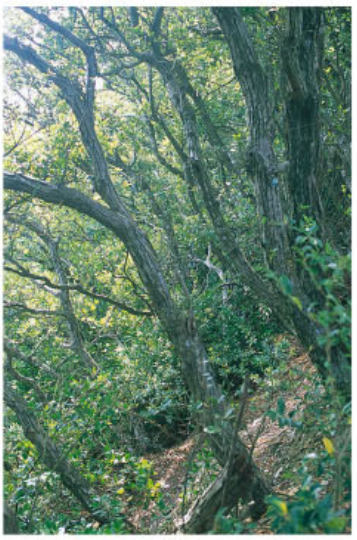
厳しい環境に育つ代表的な植物相

鶴見半島と大島は、豊後水道域の東に突き出した細長いリアス式の半島と離島で、岬の海岸のほとんどは断崖絶壁で岩石の露出した険しい地形です。半島の北側は冬の季節風をまともに受け、雨量は少なく岩場は乾き、植物の生活にとって厳しい環境です。それでもシダ植物21科86種類、種子植物104科657種の計125科743種の植物が確認されました。中でもハマホラシノブ、シゲスゲ、イヌヤブマオ、ナタオレノキ、ノアサガオなどは県内では厳しい環境のこの地域を含む豊後水道域だけしか自生していない暖地植物とされています。

崖の岩肌に咲くアシズリノジギク（右）と
ハマカンゾウ（左）

立地条件をうまくとらえた植生景観

鶴見半島と大島は、激しい海食作用で生じた海食崖などの海食地形がいたる所に見られます。ここに生える植物は、海面に向かって切り立った崖の上や急斜面、割れ目、谷間などにそれぞれの立地条件をうまくとらえて厳しい環境に耐えて生きています。表土の薄い乾燥した急斜面には潮風に耐えるウバメガシ林、海岸斜面の土壌が堆積した所にはハマビワ林が岩場や谷にしがみつくように生きています。また、大島の加茂神社林には、暖地植物のアコウがモクタチバナやノシランなどを伴ないこの地域では珍しく森林状態で残されています。

海岸急斜面に立つウバメガシ林（右）と
森林状態のアコウ林（左）

稜線沿いのシシ垣（鶴見半島）
と岩場につくカメノテの群れ（右下）

姿・形でわかる海辺の小動物、多かった野生獣

岩場の多い鶴見半島や大島の海岸には、たくさんの種類の海辺の小動物がすんでいます。それに名前も姿や形でわかるものばかりです。色で区別のダイダイカイメン、ムラサキカイメン、形で区別のカメノテ、ヨロイイソギンチャク、ウメボシイソギンチャクなど一目でわかります。

また、半島の稜線沿いには、昔から畑の作物をイノシシなどの野生獣の食害から守るために、現地の岩石を削り高く積み上げて造られた「シシ垣」が、入江ごとの集落の裏山の棚田をとり囲むように今も残されています。きっとたくさんの野生獣が人家の周りで生活していたのでしょう。

細長い地形と多彩な海食作用による特徴的な自然景観

鶴見半島と大島地域は、典型的なリアス式海岸で、全域が海食崖をはじめ、離れ岩、スタック、海食洞、海食洞門など海食地形のすべての現象が見られます。それに南側の間越（ほご）海岸は、広い砂浜海岸と潟湖も残っています。

豊後水道を北上する黒潮によってもたらされたと考えられる暖地性植物や、厳しい環境に耐えているウバメガシ林、ハマビワ林などの植生景観、季節を通じて観察される渡り鳥の群れや、海辺の小動物の群れなど景観に彩りを添えるものばかりです。また、稜線沿いに残された「シシ垣」も自然と生活の中から造られた貴重な文化景観と言えます。

多彩な海食地形の鶴御崎（つるみざき）（上）と間越（ほご）の砂浜海岸（下）